

# 私の出会った

## 山中智恵子

## 歌人

山中智恵子という名は、現代短歌に関わる者にとって特別の響きをもっている。

現代の巫女。記紀以前の古代の魂を美しい言葉によってよみがえらせる奇跡のうたびと。山中智恵子の歌に出会ったのは、歌を作り始めてすぐではなく、春日井建・塚本邦雄・齋藤史・葛原妙子と、それぞれに独創的な美の世界を構築する現代歌人の作品を読み、短歌について一種の感覚が固まって来た頃だったような気がする。

青空の井戸よわが汲む夕あかり行く方を  
思へただ思へとや

三輪山の背後より不可思議の月立てりは  
じめに月と呼びしひとはや

このような歌を読んで、私がおぼろげにと  
らえていた現代短歌とはまた全く異なる渺  
茫とした世界があるのを知った。かと言って



山中智恵子

## 水原紫苑

それはおそらく和歌ともちがう現代の精神か  
ら紡ぎ出されているのだった。

これらの歌を詠んだ山中智恵子という人が、  
鈴鹿（三重）の地にまさにうたびとらしく生  
きているのだと話に聞いて、どうしても会っ  
てみたくなった。けれどなかなか機会がなく  
何年かが過ぎて、ある年、川崎市で山中さん  
が講演をなさるとの情報が入り、私はとんで  
行った。行ってみると、講演ではなく三枝昂  
之さんの質問に山中さんが答えるという形で、

『みずかありなむ』などの歌の秘密が次々に明  
らかにされたのだった。最後に、これからの  
若い歌人に望むことは、と聞かれて、恋をし  
なければいけません、ときっぱりおっしゃっ  
たのが心に残った。その日は山中さんが三枝  
家に招かれていらしたのだが、私もついでに  
お邪魔させて頂き、山中智恵子の発する気を

心ゆくまで浴びて帰った。

お目にかかった印象は、たしかに巫女の雰  
囲気もあったが、同時にリアルな一刀両断の  
もののおっしゃり方も魅力的で、この人と恋  
をしたらさぞ楽しいだろうと思った。思いの  
深さと言葉の冴えとがこんなにも幸福な結ば  
れ方をしている例は少ないのではないか。だ  
が、山中さんと恋をするには男の側に相当な  
力量が必要になる。私がいも男でも、それを  
考えると無理である。

山中さんは外出の時はいつもきももので、素  
晴しくお洒落である。先日京都で一緒に  
時は、夏だったので、越後上布に貝紫の手描  
きで、光琳写しの秋草模様の訪問着という、  
最高級のものをお召しだった。しかもその翌  
日は水浅葱の琉球上布に着替えをなさって  
心憎いばかりだった。

説明があとさきになったが、実はこの時は  
同人誌「遊」の集まりだった。ご縁あって二  
年ほど前から谷川健一、吉田加南子の両氏と  
山中さんをメンバーとする同人誌に加えて頂  
いている。のんびりしたペースだが、いつま  
でも続いてほしいと願っているのだ。

（みずはら・しおん「中部短歌」所属・  
「NHK歌壇」番組進行役）